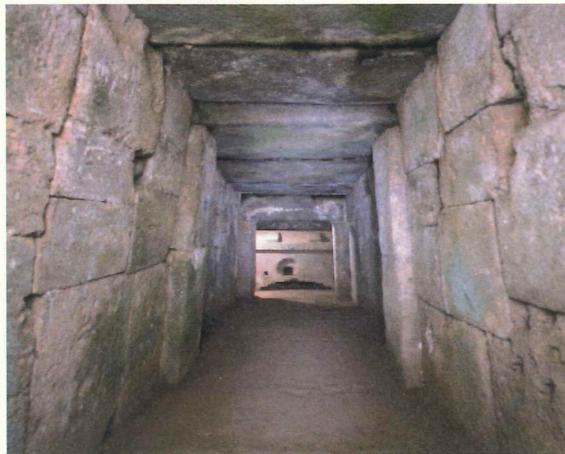


## 【宝塔山古墳の石室】

石室の全長は約12mで、前庭部（ぜんていぶ）から、羨道（せんどう）、前室（ぜんしつ）を通って玄室へと至ります。石室の壁面は、きれいに加工された切石を巧みに積み上げた「截石切組積（きりいしきりくみづみ）」という手法を採用しています。さらに石室全体に漆喰を厚く塗り、石室全体を白く平滑に仕上げています。玄室の中央には輝石安山岩製の家形石棺（いえがたせつかん）を置き、棺の脚部は「格狭間（こうざま）」と呼ばれる構造がつくり出されており、仏教文化の影響が見られます。石室のつくりや規模など畿内の有力者層の古墳と共にするとともに、石材の加工・構築技術は、当時の先端技術の粋を集めた山王廃寺の造営の技術と共通しています。



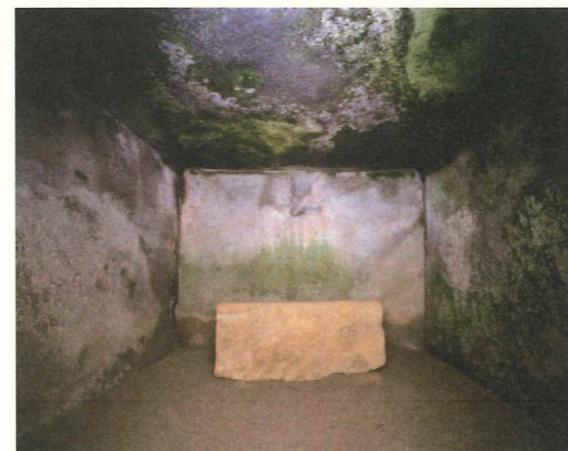
宝塔山古墳の石室と家形石棺

## 【蛇穴山古墳の石室】

前庭部からすぐに玄室につながる石室構造をとります。玄室は天井石・側壁・奥壁がそれぞれ巨石1石で構成され、各石材がしっかりと組み合うよう石の周囲をクランク状に搔きとるなど、これまでの石材加工・構築技術が最高潮に達したと言えるつくりです。その上から石室全体に漆喰を塗り、主の眠る石室全体が静ひつな空間となるよう工夫がこらされています。

## 【前橋フィールドミュージアム】

「前橋のお宝」を感じられるポータルサイト「前橋フィールドミュージアム」もぜひご覧ください。



蛇穴山古墳の石室



史跡蛇穴山古墳現地説明会資料

令和4年2月20日発行 前橋市教育委員会事務局文化財保護課

令和4年2月

しせきじやけつざんこふん

# 史跡蛇穴山古墳現地説明会資料

前橋市教育委員会

前橋市総社町を中心とした現利根川西岸には、大きな古墳が6基残されています。総社古墳群と呼ばれ、5世紀後半から7世紀後半にかけてこの地域を治めた首長の墓とみられます。特に7世紀前半から3代にわたって築かれた大型方墳は、「上毛野（かみつけの）」と呼ばれた群馬県域でも群を抜いて墳丘規模が大きく、石室も豪華なつくりで、上毛野地域全体の頂点を占めるようになったことを物語っています。

現在それぞれの古墳が本来どこまで広がっていて、どのようなつくりになっていたのか確認するための調査を進めており、今年度は史跡宝塔山古墳および史跡蛇穴山古墳の調査を行っています。

## 【史跡宝塔山古墳】

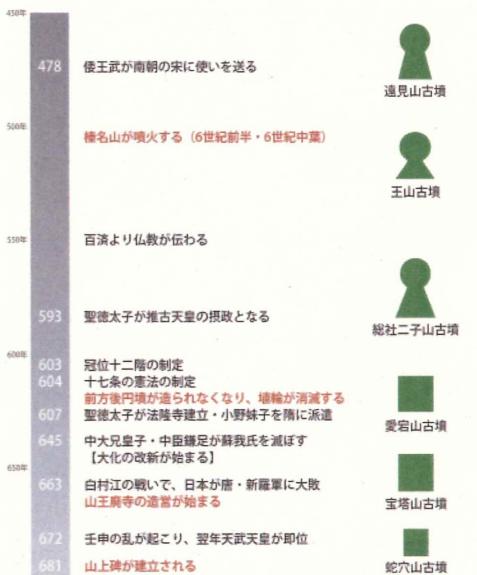
宝塔山古墳は1辺約60mを測る大型方墳で、7世紀中葉から後半につくられたと考えられます。墳丘の形状は、前代の愛宕山古墳から引き継いで四角い方墳を採用します。墳丘の高さは約12m、墳丘の周囲には幅20mほどの周堀がめぐります。

今年度の調査では、古墳北側の周堀の立ち上がりが検出でき、墳丘の周囲を広くめぐっていたことが確認できました。また、墳丘の北西コーナーが確認され、墳丘規模を正確に把握するための重要な手がかりが得られました。

## 【史跡蛇穴山古墳】

蛇穴山古墳は1辺約44mを測る大型方墳で、宝塔山古墳に続く7世紀後半に造られたと考えられます。墳丘の形状は引き続き方墳を採用し、墳丘の高さは約5mを測ります。墳丘の周囲には内堀と外堀で二重に取り囲み、中堤には葺石を施すなど豪華なつくりとなっています。

今回初めて墳丘部の調査を行ったところ、墳丘に丁寧な葺石を施していたことが確認できました。また墳丘の基壇斜面にも少なくとも2段の葺石を施しており、墳丘のコーナーでは横長の大きな石を積み上げて起点とし、丹念に葺石を施していた様子が確認できました。

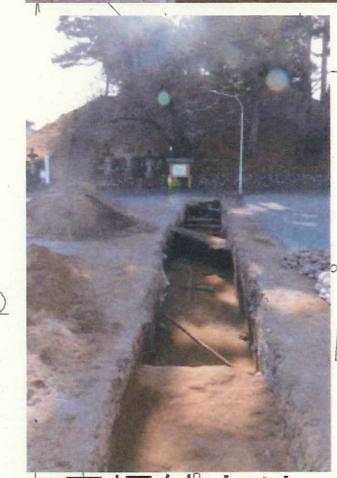


総社古墳群の変遷と主なできごと

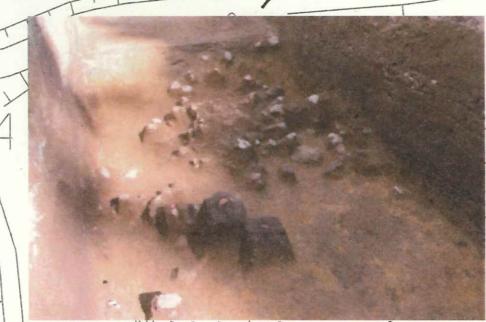
# 史跡宝塔山古墳・蛇穴山古墳調査の様子



周堀外側立上がり



周堀外より  
墳丘を望む



周堀外側立上がり



墳丘北西コーナー

